

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No.13 昭和63年6月30日



No. 446遺跡のミニチュア土器 No.446 遺跡は、東京都教育委員会の先行調査により、これらの土器を出土した縄文時代中期の敷石住居跡、古墳時代の須恵器窯、横穴墓など多くの貴重な遺構、遺物が発見されている。

東京都教育文化財団の発足
所長 土屋道生

本年4月1日に、財団法人東京都教育文化財団が発足いたしました。

この法人は、今まで「埋文センター」の名称で親しまれてきた(財)東京都埋蔵文化財センターと、東京都から都立の社会教育施設や体育施設の管理運営の委託を受けていた(財)東京都教育振興財団とが、一つの法人に統合されてできたものです。

この統合は、東京都の「法人の体制を整備し、経営基盤を強化するために、教育行政の代行・補完機能をもつ両法人を統合する」という方針によるものであります。

統合後の埋文センターは、新法人の一組織である「東京都埋蔵文化財センター」として今まで通りの事業活動をしております。今後ともよろしく御支援のほど、お願い致します。



縄文時代中期の住居跡

遺跡だより⑧

—多摩ニュータウンNo.72遺跡—

今回は八王子市堀之内地区のNo.72遺跡を紹介します。本遺跡は八王子市堀之内会館跡地にあり、南側の大栗川・北側の寺沢川との合流地点の西側・平坦な台地上に立地しています。発掘調査は、遺跡面積約五八、〇〇〇㎡のうち、南西部分の約五、五〇〇㎡の範囲を対象に、区画整理事業に先立って、今年2月から進めています。現在、表土を取り除いた段階で、先土器・平安時代の遺構・遺物が多数発見されました。中でも縄文時代中期(約四五〇〇年前)の家の跡(住居跡)や、土器・石器が数多く発見され、今回はその縄文時代について紹介します。

現在までに確認された住居跡は約90軒で、台地の南側から東側先端、そして北側縁辺と、輪を書いた様に環状に巡っており、幾つもの住居跡が重なり合っており見られています。

多摩ニュータウン地域でこれほど多くの住居跡が見つかったのは初めてで、ここに縄文時代の最大規模のムラがあった事が判ります。しかしながら、この90軒の住居すべてに、同時に人々が住んでいたのではなく、家の建て替え、増築などをしたり、また、何世代にも渡って繰り返し住んでいた結果、90軒の住居跡として、現代の我々の前に姿を現わしたのです。すなわち、このムラに一時期中に住んでいたのは、おそらく10数軒であったものと考えています。この90軒の住居跡の中には、型が江戸時代の手鏡に似て、中に石を敷きつめた「柄鏡型敷石住居跡」と呼ばれるものも7軒程発見さ

れています。

さらに、住居跡とともに多量の生活用具(土器・石器)も発見されています。煮炊・貯蔵用の土器、木の実を磨りつぶす石皿・

磨石、土掘り具(打製石斧)、伐採用斧(磨製石斧)、黒曜石・チャートでつくった矢じり(石鏃)など、数万点に及んでいます。また、中には装飾品も幾つかみられ、ピアスのおぼけのような耳飾り(耳栓)、イヤリング(珠状耳飾)、ヒスイ(硬玉)を磨いてつくったペンダント(大珠)などがあります。このヒスイは遠く富山・新潟方面から運ばれてきたものです。このように、多くの住居跡・遺物が発見されていますが、現在は、住居跡を発見した段階で、調査はごく一部に着手した状況です。今後、調査が進むに従って、徐々に、本遺跡の内容(当時のムラの様相)が明らかになっていくものと思われれます。

現地は、京王線堀之内駅の北側、旧堀之内会館跡地にありますので、興味をもたれた方は、折を見て見学に御越し下さい。(松井・斎藤・丹野)



No.72 遺跡住居跡分布図



硬玉製大珠

文化財講座 <9>

「やきもの」のうつりかわりII

縄文時代は土器の使用によって始まったといわれるように、土器が生活の向上に与えた効用は非常に大きかった。この効用については前回で触れたが、土器の用途は食料を調理したり貯蔵するだけの道具にとどまらず、その広がりには次第に非日常的なお祭りなどの精神生活に関わる部分にまでも及んでいった。約一万年前に登場し、紀元前三世紀に弥生土器と交替するまでの約八千年にわたる縄文土器の歴史の中で、土器は形や文様のみならず、その用途や機能までも変化させていったのである。

ほとんどが丸底か尖底の深鉢で、草創期の一時期に限ってみられた平底の土器は、後続がなく主流にはならなかった。ところが、土器の用途が広がってくるにつれて平底化が進み、前期には平底の土器が主流になるとともに形も文様も変化に富んだものがつくられるようになった。特に、前期の中期以降になると、深鉢の他に浅鉢・壺・台付などの盛りつけ用の器や貯蔵用の器、祭りのための器などが加わって、いろいろな用途に合わせた土器がつくられるようになった。そして中期以降になると土器の種類はさらに多様になり、新たに釣手土器、香炉形土器、異形台付土器などという食物とは直接関係しない種類までもが登場するようになる。

このように縄文土器の歴史は、煮炊き用の深鉢から出発して次第に用途を分化させ、器種を増やしていく過程でもあったのである。

多摩の歴史を訪ねて⑧

多摩の豪族大石氏 その一 この写真の武將のモデルは大石定久です。大石さんという、忠臣蔵で有名な赤穂藩国家老大石蔵之助が頭に浮かぶかも知れませんが、この大石定久は、今から約五百年前の室町時代に、多摩を中心に勢力をもっていた豪族大石氏の惣領です。

この大石定久の銅像は、八王子市由木にある永林寺の境内に建てられています。永林寺境内の墓地には、大石定久の墓といわれているものもあり、その真偽は別にしても、この由木の地が大石氏と何かかわりのあることがわかります。

では、この大石氏とは一体どういう豪族だったのでしょうか。

由木の伊藤家には「大石系図」という江戸時代に作られた大石氏の系図が伝わっています。この系図を基にした研究により、大石信重・憲重・憲儀の三代にわたる、室町時代に武蔵国の守護代を努めていた。守護代とは、いわば現地の長官で、大石氏は、武蔵国西部の多摩・入間・比企・新座郡に本拠をもっていた豪族ゆえ、守護代に抜擢されたのでしよう。

さて、奈良時代に現在の府中市に武蔵国の役所が設けられ、多摩川流域には、この役所に努める多くの氏族がいました。この氏族はやがて武士団に成長し、つとも、役所勤めも続けたようです。大石氏もまたこのような武士団の一つであり、武士団の消長の中で、室町時代に大きく活躍することとなりました。

大石氏を抜擢したのは、当時関東を支配していた鎌倉府の家老ともいえるべき管領の上杉氏でした。(その子孫が越後に移って上杉謙信となった)大石氏は上杉氏の忠実な家臣でありました。

小田原城を本拠とする後北条氏が戦国大名として関東に領土を拡大してゆくと、上杉氏と共に大石氏もこれに対抗しました。しかし、不利な状況の中で、大石定久は苦悩の選択を行います。後北条氏の子息照を養子とし、定久は隠居することとなり、事実上、大石氏は乗っ取られることとなりました。不幸なことに、秀吉による後北条氏の滅亡により、大石氏もまた滅びることとなりました。先に述べたように、その子孫が由木に土着したようです。

大石氏の特徴は、直属軍団を拡大編成することではなく、実務的行政手腕によって武士団を組織化したことにあり、これが大石氏の存立に影響しました。



(可児)

(加藤)

全国埋文協第九回総会

全国埋蔵文化財法人連絡協議会（会員法人38団体）第9回総会が去る6月9日、10日の両日、京都市の平安会館で開催されました。昭和63年度の事業計画・予算等を決定したほか、昨年の総会で開催が決まっていた

全国考古展（仮称）の正式名称を「日本列島発掘展」とし、その内容もより具体的なものとなりました。また、今年の研修会は、9月21日（火）から3日間、北海道で、札幌市を中心に開催することも決定されました。

なお、総会に先立ち、4月28日に関東ブロックの協議会が土浦市で、5月12、13の両日全国役員会が千葉市で、それぞれ開催されました。

講演と映画の会

「ガーデンシティ多摩88」に伴う行事として、5月2日、恒例の講演と映画の会

がセンター会議室で開催されました。講演は、調査研究員佐藤宏之による「縄文人の狩」、映画は、「奥三面の熊オソ」で、約70名の方々が集いました。

展示会・学会のお知らせ

昭和63年度から64年度にかけて、当センター、または関係機関において、以下の都内及び全国規模の展示会、学会が開催されます。日本列島発掘展

全国埋文協、公立埋文協、朝日新聞社の主催により、全国から発掘された最近の考古学資料を展示します。展示会は、今年8月に大阪から始まり、昭和64年3月2日、3月14日に東京大丸デパートで行われます。東京の遺跡展

東京都教育委員会の主催で、10月13日、10月19日銀座ソニービル、10月23日、10月30日立川ウイールにおいて開かれます。今回は、中世の東京がテーマとなります。

日本考古学協会一九八九年 度総会

昭和64年5月27・28日、日本考古学協会総会が東京都埋蔵文化財センター、パルテノン多摩を中心として開催される事となりました。第2回多摩ニュータウン遺跡群を考えるシンポジウム

去る1月10日に行われ好評を博しました第1回シンポジウムに引き続き、第2回シンポジウムが昭和64年2月5日、パルテノン多摩小ホールにおいて行われることとなりました。今回は、旧石器時代を中心とするテーマとなります。

復原住居の火災



No.72遺跡を見学するスウレマノフ氏

去る5月16日未明、遺跡庭園「縄文の村」の敷石住居1棟が焼失しました。多摩中央署の調べによると原因は、放火か火の不始末と思われ、現在捜査中です。

昭和62年度の来館者

展示ホールの来館者は年を追っていく毎に増え、昭和62年度は年間二二、一六六名でした。この数は昭和60年開館の年の2倍にあたります。なお開館以来の総計は四一、五五八名です。

トピックス

4月2日 第9回遺跡見学会が多摩ニュータウンNo.471・473遺跡において開か

れました。

4月28日 ソ連科学アカデミー歴史考古学・民族学研究所長スウレマノフ氏が来所されました。4月30・5月1日 日本考古学協会総会が埼玉県産業文化会館に於いて開催されました。

5月15日 第四紀学会東京大会が当センター会議室で開催されました。

▼総務課庶務係長小池友治さんが4月1日付で駒沢オリンピック公園総合運動場へ異動、この後任には教育庁総務部から玉村公一さんを迎えました。また同じく

経理係長富永弘さんが教育庁総務部へ、後任に東和市立第三中学校から斎藤昭夫さんを迎えました。

発行
 財団法人 東京都教育文化財団
 東京都埋蔵文化財センター
 〒206 東京都多摩市落合
 1-14-2
 電話 0423-73-5296
 0423-74-8044
 昭和63年6月30日